

看護学生における人生の意味・目的意識の変化について

－PILのパートAの縦断的分析－

齋藤 和樹¹⁾ 小林 寛幸²⁾ 丸山真理子³⁾ 花屋 道子⁴⁾ 柴田 健²⁾

The purpose in life of nursing students.

－ A longitudinal study of PIL's part A－

Kazuki SAITO Hiroyuki KOBAYASHI Mariko MARUYAMA
Michiko HANAYA Ken SHIBATA

要旨：われわれは3年間追跡調査した72人の看護学生のPILのPart-A部分の縦断的分析を試みた。その結果、合計得点や多くの項目で1年時の方が2・3年時よりも高く、人生の意味・目的意識が高いことが示された。

また、各学年ごとに主成分分析をした結果、学年間で若干内容が異なることが明らかになった。1年時には単純な構造であった各主成分が、学年を経るごとに分化したり、異なる主成分であったもの同士が後に統合されるなど、人生の意味・目的意識の変遷のさまを見てとることができた。特に、入学時には恐怖の対象でしかなかった「死」が自己存在とのつながりを増して自分の生きる意味や生死について主体的に考えられるようになってゆく中で「死生観」としてのまとまりを見せるに至る点は、注目に値する。

教育的課題としては、実習や専門的な技能の修得に加えて、目的意識や専門性を確立していくための講座や、生きる意味を学ぶ講座、キャリアカウンセリングなどを設ける必要性が示唆された。

キーワード：看護学生、PIL、縦断的研究

Summary : We did a follow-up study with 72 nursing students from the first grade to the third grade by using the Purpose In Life Test(PIL) and the PIL's part-A data was longitudinally analyzed. When they were in first grade they indicated higher scores than those in second and third grade. The analysis results showed that the first grade students have higher and clearer purpose of life than the second and third grade students.

According to our results of the principal component analysis of PIL's part-A by each grade, the components are different. Especially the components about "death" are different. In the first grade, they feel only fear about "death", but in the second and third grade we could see they are making their attitudes to "death" by connecting "self existence". The second and third year students are coming to think about "meaning of life" and "death" self-directionally.

This study suggests the necessity of subjects on the purpose in life and career counseling etc. for nursing students.

Keywords : nursing students, PIL, longitudinal study

1) 看護学科助教授 2) 秋田県中央児童相談所北支所 3) 秋田赤十字病院 4) 弘前大学教育学部助教授
本研究は平成12年度日本赤十字秋田短期大学共同研究助成によるものである。

I. はじめに

われわれは、過去2年間にわたって看護学生の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性をそれぞれ自作の学科志望動機質問紙、PIL (The Purpose In Life Test)、TEG (東大式エゴグラム) を用いて横断的に研究をしてきた。

今回われわれは、PILのデータを1年次から3年次までの3年間かけて追跡収集し、特にPart-Aについて縦断的分析を試みた。その結果、昨年までわれわれが取り組んできた職業意識がある程度明確になっていると考えられる看護学生の人生の意味・生きがい意識が、学年によってどのように変化するかを継続的にとらえることが可能となった。

このようなPILの縦断的研究は、ほとんど行われておらず、本研究は、日本において標準化されてまだ日の浅いPIL研究に貴重な資料を提供することになると考えられる。さらに、われわれは、この分析を通して、看護学生の教育のあり方、職業的同一性獲得のあり方、死生観の形成等についても若干言及したいと思う。

II. 研究目的

看護学生の人生の意味・目的意識の変化を縦断的に探る。

III. 研究方法

対象：日本赤十字秋田短期大学看護学科の学生を対象にした。分析に使用したのは、1年次から3年次までの3年間追跡できた学生のみ72名である。分析の対象は、他の要因が入らないように女子学生のみとし、1年の時に20歳以上の学生は分析の対象外とした。平均年齢は、1年時18.04歳、SDは、0.20である。

方法：各年次の4月の授業中に、PIL、TEG、学科志望動機の質問紙を学生に配布し学籍番号を記入させた後、回答を求め回収した。ただし、今回分析の対象にしたのは、PILのPart-Aの部分のみである。

表1 PIL パートAの質問項目一覧

A 1. 私はふだん退屈しきっている—非常に元気一杯ではりきっている
A 2. 私にとって生きることはいつも面白くてワクワクする—全くつまらない
A 3. 生きていくうえで私にはなんの目標も計画もない—非常にはっきりした目標や計画がある
A 4. 私という人間は目的のない全く無意味な存在だ—非常にはっきりした目標や計画がある
A 5. 毎日がいつも新鮮で変化に富んでいる—全く変わりばえがしない
A 6. もし出来ることなら生まれてこない方がよかった—この生き方を何度でも繰り返したい
A 7. 定年退職後(老後)、私は前からやりたいと思ってきたことをしたい—毎日をただ何となく過ごすだろう
A 8. 私は人生の目標の実現に向かって全く何もやっていない—着々と進んできている
A 9. 私の人生には虚しさや絶望しかない—ワクワクするようなことが一杯ある
A 10. もし今日死ぬとしたら、私の人生は非常に価値ある人生だったと思う—全く価値のないものだったと思う
A 11. 私の人生について考えるとしばしば自分がなぜ生きているのかわからなくなる—今ここにこうして生きている理由がいつもはっきりしている
A 12. 私の生き方から言えば、世の中はどう生きたらいいのかわからない—非常にしっくりくる
A 13. 私は無責任な人間である—責任感のある人間である
A 14. どんな生き方を選ぶかということについて遺伝や環境の影響にもかかわらず全く自由な選択ができる—遺伝や環境に完全に縛られ、全く選択に自由がないと思う
A 15. 死に対して私は十分に心の準備が出来ており、こわくはない—心の準備がなく、恐ろしい
A 16. 私は自殺を逃げ道として本気で考えたことがある—本気で考えたことはない
A 17. 私には人生の意義、目的、使命を見いだす能力が十分にある—ほとんどないと思う
A 18. 私の人生は自分の力で十分やっていける—全く私の力の及ばない外部の力で動かされている
A 19. 毎日の生活(仕事や勉強など)に私は大きな喜びを見出し、また満足している—非常に苦痛を感じまた退屈している
A 20. 私は人生になんの使命も目的も見出せない—はっきりとした使命と目的を見出している

表2 PIL-A 各項目の平均点による学年間比較

No	質問項目	1年		2年		3年		F	被験者 内要因	多重比較
		平均	S D	平均	S D	平均	S D			
A 1	退屈・元気	5.03	1.22	4.54	1.28	4.67	1.21	3.78	*	1>2
A 2	面白い・つまらない	5.50	0.96	5.46	1.06	5.24	1.12	2.31	ns	
A 3	目標なし・あり	6.11	1.00	5.88	1.11	5.86	1.01	2.14	ns	
A 4	無意味存在・意味ある存在	5.36	1.15	5.21	1.15	5.01	1.33	2.65	+	1>3
A 5	新鮮・変化無し	5.21	1.41	4.08	1.51	4.17	1.55	16.33	**	1>2,1>3
A 6	生まれない・繰り返したい	5.11	1.39	4.75	1.33	4.65	1.31	4.99	**	1>2,1>3
A 7	老後したいこと・何となく	5.61	1.88	5.10	2.23	5.14	2.04	2.68	+	1>2
A 8	実現何も・着々	5.88	1.35	5.54	1.40	5.54	1.28	2.58	+	
A 9	むなしさ・わくわく	5.68	1.03	5.49	1.09	5.24	1.04	5.55	**	1>3
A10	価値あり・なし	5.57	1.30	5.35	1.43	5.01	1.63	6.02	**	1>3,2>3
A11	生きる理由DK・はっきりしている	4.14	1.84	3.94	1.64	4.10	1.74	0.67	ns	
A12	生き方DK・しっくり	3.85	1.38	3.93	1.15	3.93	1.23	0.15	ns	
A13	無責任・責任	5.43	1.34	5.06	1.37	4.89	1.34	6.62	**	1>2,1>3
A14	自由・縛られる	5.50	1.51	5.08	1.45	4.88	1.52	6.11	**	1>2,1>3
A15	死怖くない・怖い	2.82	2.07	2.69	1.90	3.00	1.74	1.02	ns	
A16	自殺考えた・考えない	4.92	2.22	4.75	2.40	4.63	2.30	1.46	ns	
A17	能力あり・なし	4.67	1.43	4.29	1.55	4.33	1.51	2.15	ns	
A18	自分の力・外部の力	4.92	1.55	4.65	1.43	4.51	1.33	3.04	+	1>3
A19	満足・退屈	4.88	1.28	4.74	1.22	4.56	1.32	1.75	ns	
A20	目的見出せない・見出している	5.33	1.46	5.13	1.31	4.99	1.41	2.38	+	1>3
合計		101.5	15.78	95.59	15.09	94.33	15.58	13.63	**	1>2,1>3

+…p<.10, *…p<.05, **…p<.01

IV. 結果と考察

1) 分散分析を用いてPILのPart-A得点の平均点を、各学年で比較すると、表2のようになる(PILのPart-Aの質問項目は表1参照)。

各年次でPart-A得点の合計点を比較すると、1年と2・3年との間に有意な差($P<.01$)が見られた。2・3年生になると1年生の時よりも明らかに得点が低下している。このことは、1年生の時の方が、人生の意味・目的意識を明確に持っており、学年を経て2・3年生になると人生の意味・目的意識の不確かさが増していくということを示している。

具体的な項目を見ていくと、A5、A6は、1年よりも2・3年の方が有意($P<.01$)に得点が低下している。このことから、2・3年生の方が1年生よりも実存的空虚感が増していることがうかがえる。2・3年生になると、自己存在への疑問を持つようになっていくのだろう。

A13、A14も、1年よりも2・3年の方が有意($P<.01$)に得点が低下している。これは、

2・3年生になると縛られることが多くなるのを感じ、責任が増すのを実感するようになるが、その責任を抱えられないために、自分を責任ある存在と感じにくくなるということであろう。

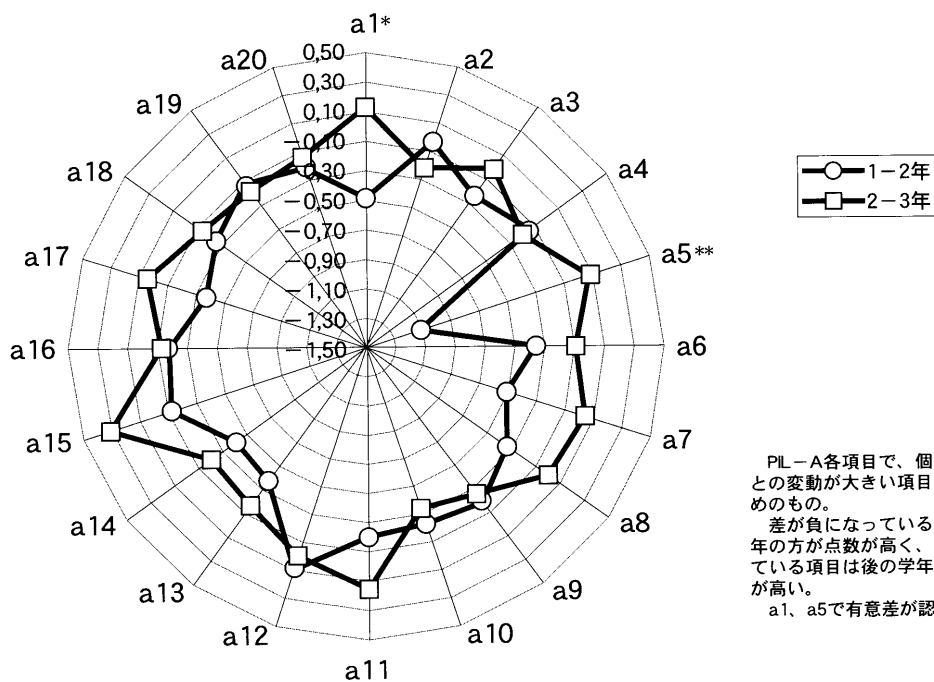
A10は、1年>2年>3年という関係にあり、有意な差($P<.01$)が認められる。このことから、1年生の方が2年生より、2年生の方が3年生よりもそれまでの人生に価値を見出しているといえる。

表3 PIL-A 得点の学年差比較

No	質問項目	1-2年		2-3年		差の平均(絶対値)	差のSD	t値 (df=71)	有意確率 (両側)	p
		平均値	SD	平均値	SD					
A 1	退屈・元気	-0.486	1.434	0.125	1.538	0.611	2.447	-2.119	0.038	*
A 2	面白い・つまらない	-0.042	0.941	-0.222	1.247	0.181	1.886	0.812	0.419	n.s.
A 3	目標なし・あり	-0.236	1.055	-0.014	1.216	0.222	1.944	-0.970	0.335	n.s.
A 4	無意味存在・意味ある存在	-0.153	1.122	-0.194	1.274	0.042	1.924	0.184	0.855	n.s.
A 5	新鮮・変化無し	-1.125	1.792	0.083	1.904	1.208	3.180	-3.224	0.002	**
A 6	生まれない・繰り返したい	-0.361	1.346	-0.097	0.995	0.264	1.831	-1.223	0.225	n.s.
A 7	老後したいこと・何となく	-0.514	2.000	0.042	1.989	0.556	3.280	-1.437	0.155	n.s.
A 8	実現何も・着々	-0.333	1.424	0.000	1.529	0.333	2.627	-1.077	0.285	n.s.
A 9	むなしさ・わくわく	-0.194	1.070	-0.250	1.184	0.056	1.942	0.243	0.809	n.s.
A10	価値あり・なし	-0.222	1.313	-0.333	1.434	0.111	2.395	0.394	0.695	n.s.
A11	生きる理由DK・はっきりしている	-0.194	1.440	0.153	1.381	0.347	2.278	-1.294	0.200	n.s.
A12	生き方DK・しっくり	0.083	1.489	0.000	1.163	0.083	2.074	0.341	0.734	n.s.
A13	無責任・責任	-0.375	1.316	-0.167	1.175	0.208	2.076	-0.852	0.397	n.s.
A14	自由・縛られる	-0.417	1.625	-0.208	1.453	0.208	2.664	-0.664	0.509	n.s.
A15	死怖くない・怖い	-0.125	1.528	0.306	1.851	0.431	2.705	-1.350	0.181	n.s.
A16	自殺考えた・考えない	-0.167	1.482	-0.125	1.278	0.042	2.273	-0.156	0.877	n.s.
A17	能力あり・なし	-0.375	1.795	0.042	1.486	0.417	2.792	-1.266	0.210	n.s.
A18	自分の力・外部の力	-0.264	1.538	-0.139	1.367	0.125	2.600	-0.408	0.685	n.s.
A19	満足・退屈	-0.139	1.427	-0.181	1.532	0.042	2.608	0.136	0.893	n.s.
A20	目的見出せない・見出している	-0.208	1.278	-0.139	1.314	0.069	2.132	-0.276	0.783	n.s.

*... $p < .05$, **... $p < .01$

図1 学年差比較



PIL-A各項目で、個人内の学年ごとの変動が大きい項目を比較するためのもの。
 差が負になっている項目は前の学年の方が点数が高く、差が正になっている項目は後の学年のほうが点数が高い。
 a1、a5で有意差が認められた。

2) P I Lの Part-A得点を1年から2年になったときと2年から3年になったときの変化の差を比較すると、表3、図1のようになる。

項目のA 1とA 5にのみ有意な差 (P<.01) が認められた。A 1においては、1年から2年になると大きく得点が下がり、2年から3年になるとときには、わずかに得点が上がる。このことは、1年から2年になると退屈するようになり、3年になって2年よりは少し元気が出てくるということの意味している。

A 5においては、1年から2年になると大きく得点が下がり、2年から3年になるとほんの少しだが得点が上がっている。これは、1年から2年になると、毎日が変わりばえしないと感じるようになり、2年から3年になると毎日に少し変化を見出し、再び新鮮さを感じられるようになるということの意味している。

以上の点を教育カリキュラムとの関連から考えてみる。1年の時はほとんどが座学の講義であり、これは高等学校でも経験していることでもある。看護という具体的援助法を学ぶことを期待して入学しても、座学で基礎知識を詰め込む学習を1年間経験することで、2年生に成り

たての頃は、退屈し、毎日が変わりばえしないと感じるようになってきているのかも知れない。また、2年次で臨床実習の時間が増え、病院等で実際の患者さんに触れ、看護の具体的体験をすることで看護の実感がわき、3年時には、少し元気が出て、毎日の生活に変化を見出せるようになってきているのだろう。

3) P I Lハンドブック (1998) のP I L-A診断基準に従い得点の高い群 (H群：110点以上)、中程度群 (M群：80-110点)、低い群 (L群：80点未満) に分け、それぞれの群の人数の度数分布を学年ごとに比較したのが、図2である。

この図を見ると、H群が1年時より2・3年になると人数が減少している。これは、1年よりも2・3年になるに従い、人生の意味・目的意識が薄れると解される。1年時のH群、すなわち、人生の意味・目的意識のはっきりしている人たちの約半数が2・3年時に人生の意味・目的の体験が減少してしまうということは、教育上大きな問題としてとらえておくべきであろう。

一方、L群の人数は3年間を通してほとんど変化していない。

図2 各得点群の学年推移

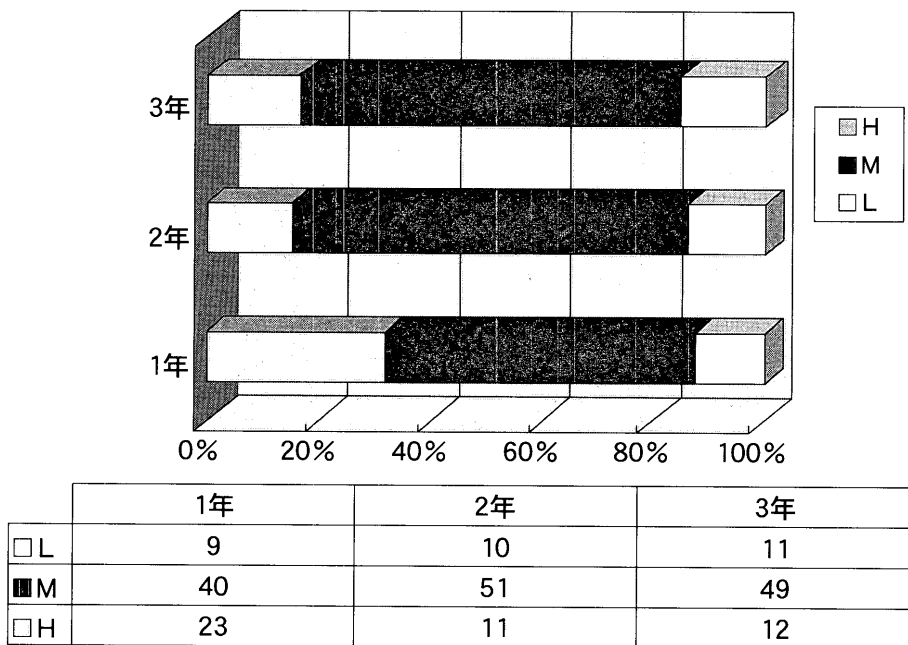


表4 学年ごとのPIL-Aの因子分析

1年		成分				
No	質 問 項 目	1	2	3	4	5
A17	能力あり・なし	0.802	0.115	-0.003	-0.053	-0.018
A03	目標なし・あり	0.799	0.011	0.160	0.094	0.146
A20	目的見出せない・見出して	0.741	0.277	0.246	0.175	-0.055
A08	実現何も・着々	0.732	0.204	0.301	0.029	0.114
A18	自分の力・外部の力	0.688	0.153	-0.066	0.205	0.077
A07	老後したいこと・何となく	0.500	0.296	0.099	0.308	-0.264
A01	退屈・元気	0.026	0.820	0.360	0.088	0.048
A05	新鮮・変化無し	0.220	0.741	0.030	-0.090	0.131
A19	満足・退屈	0.456	0.658	0.040	0.108	-0.235
A02	面白い・つまらない	0.148	0.588	0.309	0.329	0.027
A09	むなしさ・わくわく	0.318	0.523	0.419	0.199	-0.262
A14	自由・縛られる	-0.088	0.199	0.712	0.049	-0.051
A13	無責任・責任	0.392	0.078	0.672	-0.057	-0.127
A10	価値あり・なし	0.153	0.075	0.660	0.226	0.270
A06	生まれない・繰り返したい	0.072	0.475	0.637	0.347	-0.052
A04	無意味存在・意味ある存在	0.550	0.227	0.593	0.185	-0.205
A11	生きる理由DK・はっきりしている	0.339	0.272	0.105	0.783	0.137
A16	自殺考えた・考えない	-0.203	0.037	0.107	0.759	-0.302
A12	生き方DK・じっくり	0.342	-0.009	0.157	0.708	-0.046
A15	死怖くない・怖い	0.084	0.034	-0.019	-0.121	0.909

因子抽出法：主成分分析・回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

2年		成分					
No	質 問 項 目	1	2	3	4	5	6
A05	新鮮・変化無し	0.818	0.004	0.136	0.276	0.039	0.107
A01	退屈・元気	0.807	-0.002	0.108	0.082	-0.064	0.067
A09	むなしさ・わくわく	0.653	0.325	0.354	0.084	-0.138	0.030
A12	生き方DK・じっくり	0.551	0.468	-0.043	-0.222	0.420	0.208
A04	無意味存在・意味ある存在	0.462	0.365	0.439	-0.021	0.119	0.041
A10	価値あり・なし	0.422	0.322	0.283	0.233	0.404	0.058
A06	生まれない・繰り返したい	0.133	0.810	0.085	0.132	0.111	0.066
A16	自殺考えた・考えない	-0.073	0.778	0.135	0.007	-0.107	-0.232
A11	生きる理由DK・はっきりしている	0.186	0.776	0.073	0.129	0.130	0.138
A08	実現何も・着々	0.181	0.089	0.840	-0.026	0.142	-0.078
A03	目標なし・あり	0.141	0.044	0.782	0.055	-0.027	0.139
A20	目的見出せない・見出している	0.112	0.150	0.711	0.293	0.260	0.254
A02	面白い・つまらない	0.399	0.374	0.412	0.332	-0.154	0.177
A07	老後したいこと・何となく	0.170	0.082	-0.024	0.801	0.112	-0.167
A17	能力あり・なし	0.084	0.094	0.181	0.745	0.278	0.253
A19	満足・退屈	0.383	0.276	0.309	0.412	0.151	0.214
A18	自分の力・外部の力	-0.111	0.170	0.167	0.195	0.725	-0.261
A15	死怖くない・怖い	-0.012	-0.041	0.031	0.160	0.705	0.164
A14	自由・縛られる	0.065	0.053	0.100	0.082	-0.074	0.880
A13	無責任・責任	0.327	-0.071	0.211	-0.072	0.347	0.524

因子抽出法：主成分分析・回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

2年

成分

No	質 問 項 目	1	2	3	4	5
A05	新鮮・変化無し	0.821	0.163	0.042	0.154	-0.042
A09	むなしさ・わくわく	0.817	0.101	0.076	0.172	0.164
A01	退屈・元気	0.768	0.116	0.092	0.164	-0.117
A02	面白い・つまらない	0.720	0.220	0.272	0.018	-0.032
A19	満足・退屈	0.716	0.223	-0.049	0.278	0.015
A10	価値あり・なし	0.630	0.432	0.208	-0.131	0.020
A06	生まれない・繰り返したい	0.621	0.192	0.436	0.180	0.209
A04	無意味存在・意味ある存在	0.546	0.340	0.356	0.216	0.030
A03	目標なし・あり	0.204	0.775	-0.010	0.120	-0.113
A20	目的見出せない・見出している	0.352	0.688	0.122	0.032	0.227
A07	老後したいこと・何となく	-0.009	0.643	0.264	-0.164	-0.323
A08	実現何も・着々	0.289	0.593	-0.069	0.364	0.208
A17	能力あり・なし	0.291	0.573	0.099	0.438	0.143
A16	自殺考えた・考えない	0.070	0.114	0.850	0.133	-0.083
A11	生きる理由DK・はっきりしている	0.420	0.125	0.681	0.168	0.158
A15	死怖くない・怖い	-0.103	0.098	-0.540	0.061	-0.444
A18	自分の力・外部の力	0.073	0.108	0.115	0.787	-0.089
A12	生き方DK・じっくり	0.395	-0.032	0.263	0.633	0.108
A13	無責任・責任	0.317	0.424	-0.193	0.457	0.244
A14	自由・縛られる	-0.061	0.055	0.092	0.037	0.875

因子抽出法：主成分分析・回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

4) 各学年ごとのPILのPart-A部分を主成分分析した結果が、表4である。

1年時では5つの主成分、2年時では6つの主成分、3年時では5つの主成分がそれぞれ抽出され、学年間で若干内容が異なることが明らかになった。各学年で抽出された主成分を、フランクフルト、V.E.の理論に基づいて以下のように名付けた。

1年…Ⅰ：目的意識、Ⅱ：日常生活の手応え、Ⅲ：責任性、Ⅳ：存在意義、Ⅴ：死の恐怖

2年…Ⅰ：日常生活の手応え、Ⅱ：存在意義、Ⅲ：目的意識、Ⅳ：自己信頼、Ⅴ：死、Ⅵ：責任性

3年…Ⅰ：日常生活の手応え、Ⅱ：目的意識、Ⅲ：死生観、Ⅳ：自律性、Ⅴ：選択性

1年時における第Ⅰ主成分は「目的意識」であった。高校生活を無事終え、短大受験をやり遂げたという達成感や、これから本格的に始まるであろう短大生活への期待感や目的意識に重きがおかれているなど、入学当初にとったデー

タであるという特徴がよく表れている。A15は、他の項目と結びつくことなくたったひとつの項目で主成分を構成しており、この段階では「死」というものはまだ恐怖の対象であり、自分の人生から切り離された別次元のものとして考えられていることがうかがえる。

2年生になると、1年時に第Ⅰ主成分であった「目的意識」から「自己信頼」が分化して第Ⅲ・第Ⅳ主成分を構成し、第Ⅱ主成分であった「日常生活の手応え」に自己存在に対する問いが加味されて第Ⅰ主成分を構成するようになる。また、1年時には第Ⅳ主成分であった「存在意義」が第Ⅱ主成分として浮上してくる。このように、2年生になると明確な目的意識や達成感は薄れ、実存的空虚感が意味・目的意識の前面に現れはじめる。このような自己存在の揺らぎに呼応するように将来への不安が現れたり、存在における責任性の重みが減少するというような意味・目的意識の変化が見られる。さらに「死」は、自分から切り離されたものではなく、運命的なものとして近くに感じられ始める。

3年生のデータを見てみると、第Ⅰ主成分では2年時からの目立った変化はないが、2年時

に分化していた「目的意識」と「自己信頼」が再びまとまって第Ⅱ主成を構成するに至る。また、2年時までは別々のものとして感じられていた「死」と「存在意義」が結びついて「死生観」としてのまとまりを見せるようになる。

「日常生活の手応え」は、3年時でも依然として最も重みづけの大きい主成分であるが、2年時に低下した目的意識や達成感が再び重みを増してくることは重要であろう。ただ、「選択性」が最も弱い重みづけしか持ち得ていないということは、人生の意味や目的といったものを自分で主体的に選び取っていくということが目的達成に結びついたり、実存的空虚感を弱めるものとしては、まだ十分に機能し得ないということを示してもいると思われる。

以上の結果から、1年時には単純な構造であった各主成分の項目が、学年を経るごとに分化したり、異なる主成分であったもの同士が後に統合されるなど、人生の意味・目的意識の変遷のさまを見ることができるといえる。なかでも「目的意識」を構成する主成分から「自己信頼」が分化した後、再び「目的意識」として集約されることや、入学時には恐怖の対象でしかなかった「死」が自己存在とのつながりを増していくにつれて身近なものとして感じられるようになり、自分の生きる意味や生死について主体的に考えられるようになってゆく中で、「死生観」としてのまとまりを見せるに至る点は、注目し得る。これは、単純に自己の能力にのみ従って目標を設定し、それを達成することが目的だったものが、学年を経るに従って自分自身にとっての目標や自分の生き方を考えることへと変化し、その中で改めて自己の存在意義や意味・目的意識の問題に直面していくと見ることができるといえる。これに伴って、それまでは重要視してこなかった「死」というものが身近な問題となり、自己存在のあり方や意味・目的意識、「死生観」といったものが次第に形成されていく。こうした過程を経る中で、当初は自分自身の目的意識や存在意義とは別のものとして捉えられていた日常生活の手応えといった側面が自己存在に対する問いと深く結びついていき、人生の意味や目的を探ること自体が重要なものと感じられるようになってくる。

5) まとめ

1) から 4) までを総合すると、高校卒業と

短大合格という人生初期の目的を達成し、充足感を味わっている1年時と違って、2・3年時は自分が本当は何をしたいのかということを見失っている状態にあると言える。つまり、ある種の同一性拡散の危機に陥っていると考えられるが、看護学生にとって短大は職業訓練をする場であるという特殊性を考慮すると、看護学生のアイデンティティ形成と職業的同一性の達成とは概念的に重なり合う部分が多分にあり、その意味において、職業的同一性拡散の危機にあると見ることも可能である。

ここで述べている職業的同一性の達成とは、青年期に確立した同一性の感覚をふまえて価値観や生き方を確立し、将来の職業を選んでその準備活動や職業行動そのものに傾倒していくことを指す。Marcia (1966) は同一性の状態を表すために同一性地位という概念を用い、同一性の状態を規定する心理社会的要因として、(1) 危機の有無 (いかなる役割、職業、理想、イデオロギー等が自分にふさわしいかについて迷い考え思考する時期の有無) と (2) コミットメントの有無 (自己定義を実現し自己を確認するための独自の目標や対象への努力の傾注の有無) の二つを挙げている。この中で、早期完了 (権威受容的地位) と名づけられる地位は、危機を経ることなしに、両親や社会通念が支持するものを自らのコミットメントの対象としているものを指す。

看護学科への志望は、ある程度明確な進路を想定するものであり、モラトリアムを求める学生が混入しにくい面を持っていると考えられるため、看護学生の中には早期完了の同一性地位にある者が多分に含まれている可能性が高い。この早期完了という見方に立てば、同一性が一見形成されているように見えるものの、その後危機を体験することにより、同一性拡散に向かう危険性を孕んでいる。つまり、「看護婦になる」と思って入学してはみたものの、それが真の自己決定としてなされていない場合には、漠然とした将来への不安や、なんとなく手応えが感じられない、といった実存的空虚感を体験することとなる。

その一方で、とりあえず進むべき方向性が定まっているという安心感があるために、自己のあり方について徹底して悩むことを保留して、部分的なモラトリアムの状態であることができ

る。このような早期完了とモラトリアムの間を残しておくことによって、意味・目的意識を持っていない現状に直面して深刻な危機状況に陥ることなく、「とりあえずやってる」という手応えに寄りかかって、日常生活にそれなりに適応できているのではないかと思われる。この、「そんなにやっているわけでもないが、本当にがんばってる感じもしない」という中途半端な状態が、PIL全体としてみた時に中程度という結果として現れているものと思われる。したがって、2年生になってPIL-A得点が下がるのは、入学当初の一時的な達成感が1年時のPILの高さに貢献しているとみる方が妥当であろう。それは、項目によっては2年時に落ち込んで3年時になると持ち直すものもあるが(A1、A5、A7、A11、A15、A17)、その変化に有意差はなく、自己の職業的同一性に対する不確かさはさほど変化しないことがデータから示されているためである。

教育的課題としては、看護婦というイメージにあこがれて入学した学生たちが、病院実習などを通して看護現場の現実を目の当たりにする中で自信をなくしたり、同一性が揺さぶられて拡散してしまいそうな危うさを、共に抱え、育てる教育が求められていると思われる。ただ、「死」というものに対する学生たちの考え方が成長していくことにも示されているように、こうした危機は単に忌避すべきものではなく、職業的同一性を形成し、その後の彼女たちの専門性の確立を確かなものにしていくためにも必要な体験であり、いかにこうした危機を内包した過渡期にある学生たちを支えてゆくか、ということ考えたカリキュラムを組んでいくことが大切だと考える。そのためには、実習(1年次にも多くの時間をとった方がよいと思われる)や専門的な技能の修得に加えて、目的意識や専門性を確立していくための講座や、生きる意味を学ぶような講座(例えば哲学や死生学など)、そういうことを考えるための機会(例えば講演会やキャリアカウンセリングなど)を設けるといようなことが必要になるのかもしれない。こうした側面からの働きかけが、とすれば方向を見失いがちな学生たちに、自分とは何かを深く考えたり、職業的同一性を形成してゆくの役に立つのではないだろうか。

V. おわりに

今回のデータは、いずれも4月の段階で取ったものであるため、3年生と言ってもその実体は2年生を終えた人にすぎず、十分実習を経て生き残った3年生とはずいぶん趣が異なるものと想像される。そのため、3年生での実習を全て終えた時点でのデータを取って、今後は3年間の変化の全体像を把握する必要があると考えている。

参考文献

1. 堀洋道、山本真理子、松井豊編：心理尺度ファイル、垣内出版、1994
2. 菊地和子：看護学生の病気についてのイメージに関する研究、岩手大学人文社会科学部研究紀要、第6号、Pp.97-106、1998
3. 小林寛幸：青年の意味・目的意識についての心理学的研究 - 自我同一性発達との関連性の検討 -、岩手大学大学院修士論文未公開、1998
4. Marcia, J.E. : Development and validation of ego-identity status., *Journal of Personality and Social Psychology*, 3 (5), Pp. 551-558, 1966
5. 齋藤和樹、小林寛幸、丸山真理子、花屋道子、柴田健、田多香代子：看護学科の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性の関連について - PIL と TEG の分析を通して -、日本赤十字秋田短期大学紀要、No 4、Pp.3-8、1999
6. 齋藤和樹、丸山真理子、小林寛幸、花屋道子、柴田健：看護学科の学科志望動機、人生の意味・目的意識、性格特性の関連について (II) 日本赤十字秋田短期大学紀要、No 5、Pp.43-47、2000
7. 佐藤文子監修：PIL テストの全体像と分析方法 PIL ハンドブック第I部、システムパブリカ、1998
8. 佐藤文子監修：PILテストの評定と解釈の実際 PIL ハンドブック第II部、システムパブリカ、1998
9. 佐藤文子監修：PILテストの臨床・研究への適用 PIL ハンドブック第III部、システムパブリカ、1998
10. 酒井志保、滝内隆子、佐々木真紀子、大島弓子：看護学生の受験理由と看護学科選択理由に関する実態 - 本学看護学科1期生の入学時調査から -、日本赤十字秋田短期大学紀要、No 1、Pp.77-82、1996
11. 酒井志保、滝内隆子、大島弓子、佐々木真紀子、南雲美代子：看護学生の受験理由と看護学科選択

理由に関する実態（第2報）－本学看護学科2期生の入学時調査から－，日本赤十字秋田短期大学紀要，No 2，Pp.33-41，1997

12. 酒井志保，大島弓子，滝内隆子，佐々木真紀子，南雲美代子：本学看護学科学生の学校および看護学科選択理由の検討－本学看護学科3期生と2期生の入学時調査を比較して－，日本赤十字秋田短期大学紀要，No 3，Pp.45-51，1998